青春スクロール 私の母校

東京都立西高校③（東京都杉並区）

夢中になる→ライフワーク

若手育成にも力を入れている吉田雄生さん。女子中高生ボーカルユニット「リトル・グリー・モンスター」を手がけている

西高名物の一つ「浪漫倶楽部」。1975年から続く有志の活動で、自作映画を文化祭で上映する。公園の池に飛び込むと西高の通称「愛の泉」から出てくる、といったコメディーが伝統だ。

「1年の時に見て感動して、仲間に入れてもらいました。それからは一年中、くだらないことをきわめることばかり考えてました」と、ワタナベエンターテインメント取締役の吉田雄生さん（53、81年卒）。中川翔子ら、アーティストのプロデュースを手掛けてきた。

当時の撮影では、中国大使館の前でマージャンをしたり、成田国際空港（千葉県）で万国旗を縫い付けたパンツだけを身に着けて行進したり。「何回も補導されました。学校は？と聞かれ、休みですとうそをついたら学校に電話されてしまった。出た先生は『休みですよ』と答えてくれたんです。自分で始末をつけろ、と大人扱いしてくれたんだと今は思います」

横浜国立大学在学中も、西高の同級生4人でライブイベントなどを企画。卒業後、ニッポン放送に入社した。テレビという「主流」ではなく、「少数派」のラジオ局。サブカルチャーが好きなのだ。「高校時代からずっと同じことをしています。しんどいけど、こんなに楽しい仕事はない」

西高は高校アメリカンフットボールの草分けでもある。48年創部と、70年近い歴史を持つ。

Xリーグ所属のオービックシーガルズでヘッドコーチを務める大橋誠さん（50、84年卒）は入学式の日、前年は都大会で準優勝したと聞き、強さにひかれて入部した。

練習はとにかくきつかった。休みたいあまり「学校に爆弾をしかけた」と電話することも考えたほど。

部の同期は6人。練習中にだれかが倒れると「その間は休める、とホッとした」。互いの弱さや嫌な部分もすべてさらけ出した特別な存在だ。

警察官の試験を受けようと思っていた3年の秋。先輩のいる早稲田大学のチームの試合を見て「高校とは全然違う。あれをやるなら大学に行かなきゃ」と決意。同大に進学した。

ビジネスに魅力を感じてリクルートに入社すると、社内のアメリカンフットボールチームから声がかかった。「弱小チームなのに『日本一になりたい』って。本気で言うので入ってしまった」。仕事と両立しながら97年、ついに日本選手権・ライスボウルで初の日本一に輝いた。

その後は選手兼コーチ、そしてプロコーチとして活動。クラブ化し、メインスポンサーも変わったチームを率いてきた。「がむしゃらにやっていたら道が開けた。フットボールに少しは恩返しができたかな」

（編集委員・吉田由紀）

大橋誠さん。「役割が決まっているアメリカンフットボールは、不器用でも愚直に自分の得意なことを磨けばいい。西高生に向いていると思います」